

教育思想史学会第29回大会

プログラム

2019年9月14日・15日

立教大学池袋キャンパス

大会参加費

| | 一 般 | 学 生 |
|-----|--------|--------|
| 会 員 | 3,500円 | 2,000円 |
| 非会員 | 4,000円 | 2,500円 |

※高校生の参加費は無料となります。受付時に、生徒証などをご提示ください。

懇親会費

| 一 般 | 学 生 |
|--------|--------|
| 5,000円 | 3,000円 |

大会日程

9月14日（土）

| | |
|-------------|---|
| 9：30～ | 受付（14号館1階ロビー） |
| 10：00～13：00 | コロキウム1「教育学が〈幼児〉と出会うとき」（4号館別棟・4152） |
| | コロキウム2「ヨナスとアレント」（14号館・D601） |
| | コロキウム3「教育（学）と政治（学）」（14号館・D602） |
| | コロキウム4「教育学のフロイト受容を問いなおす」（14号館・D603） |
| 13：10～14：10 | 理事会・編集委員会合同会議（12号館地下会議室） |
| 14：20～14：30 | 奨励賞表彰式（14号館・D201） |
| 14：30～15：15 | 総会（14号館・D201） |
| 15：20～18：20 | シンポジウム「ハルモニアの思想史における音楽と人間形成」（14号館・D201） |
| 18：30～20：30 | 懇親会（第一食堂） |

9月15日（日）

| | |
|-------------|---|
| 9：00～ | 受付（14号館1階ロビー） |
| 9：30～12：30 | コロキウム5「高校生が考える思想、哲学」（4号館別棟・4152） |
| | コロキウム6「〈教育思想史〉の誕生（4）」（14号館・D601） |
| | コロキウム7「1970年代教育学の諸相」（14号館・D602） |
| | コロキウム8「ポップカルチャーの教育思想」（14号館・D603） |
| 13：30～15：15 | フォーラム1「教育思想史におけるヴィルヘルム・フォン・フンボルト——「古典的陶冶理論」の生成および展開の可能性——」（14号館・D201） |
| 15：30～17：15 | フォーラム2「高等教育とデモクラシー—アメリカにおけるラーニング・コミュニティ論の歴史的検討から—」（14号館・D201） |

※コロキウムについてはスペースの都合で副題を外してあります。

〔第1日目〕 9月14日（土）

コロキウム 1（4号館別棟・4152）

教育学が〈幼児〉と出会うとき

——矢野智司、中田基昭、佐伯胖を読む

企画者：田口賢太郎（山梨学院短期大学）

司会者：青柳宏幸（山梨学院短期大学）

報告者：田口賢太郎（山梨学院短期大学）

富田純喜（高崎健康福祉大学）

安部高太朗（郡山女子大学）

幼児教育は、それ以上の年齢の子どもたちを対象とする学校教育とは、思想・制度・実践のいずれの面においても大きく異なる特殊なものとされてきた。そして、これに対応して、教育学において幼児教育は周縁的な存在であり続けてきた。このことは、例えば、多くの大学で「幼児教育」が他の学校教育を扱う講座・教室とは別個の講座・教室として制度化されていることにも象徴されている。「幼児教育」は、他の発達段階の子どもを対象とする教育学と制度的に切り離され、理論的な交流も相対的に乏しく、「幼児教育」は「教育学」において「ゲッター化」されているといえる。

だが、例えば、発達心理学において幼児期の研究が発達理論全体に与えた意義を考えると、教育学においてもこの「ゲッター化」越えた先に大いなる可能性が広がっているのではないだろうか。

本コロキウムは幼児教育を研究の対象とすることによって広がる教育学研究の可能性を広げることを試みる。具体的には、その先駆者として矢野智司、中田基昭、佐伯胖の三氏を取りあげる。彼らは、それぞれ幼児教育を主題としたテキストをものしているという共通点をもつ。彼らのテキストを読み、「幼児を対象とすることが教育思想においてどのような意味をもつのか」という視点から検討する。この検討を通して、「幼児教育」を対象として研究をすることが教育学一般にいかなる意味を持ちうるのかを考えていきたい。

ヨナスとアレント

—出生をめぐる思想と未来への責任—

企画者：石神真悠子（東京大学・院生）

田中智輝（立教大学）

田中直美（武蔵丘短期大学）

村松 灯（立教大学）

司会者：石神真悠子（東京大学・院生）

報告者：戸谷洋志（大阪大学）

田中智輝（立教大学）

田中直美（武蔵丘短期大学）

村松 灯（立教大学）

ハンス・ヨナスとハンナ・アレントは実に多くのことを分かち持ちつつ、それぞれに独自の思想を形成した哲学者としてよく知られている。二人はドイツに生まれ暗い時代を生き抜いたユダヤ人であり、ハイデガーの弟子であり、時には同僚でもあり、そして生涯を通じて無二の友人であった。両者はともに、子どもが生まれるという事実が人間の生においていかなる意味を持つのかという問いを徹底的に思考することを通じて、西洋哲学の系譜に新たな視角をもたらした。

アレント思想が「出生」を核心とするものであることはいまや論を俟たないが、彼女の「出生」概念の意義を最も早い時期から高く評価し、それに呼応して独自の責任論を展開したのはヨナスであった。しかしながら、ヨナスの思想については日本の哲学・倫理学、そして教育学においても十分な受容がなされているとは言い難い状況が続いてきた。こうしたなかで、戸谷洋志氏による近年の研究は、ヨナス思想の革新性と現代社会への批判性を鮮やかに描き出したものとして高い関心を集めている。

本コロキウムでは、近年の研究知見をもとに、ヨナス思想の教育学的需要の可能性を探ることを第一のねらいとしている。とりわけ、出生と未来への責任をめぐる思想に着目して、ヨナスとアレントの交差においてどのような教育的課題が立ち現れるのかを明らかにしたい。

教育（学）と政治（学）

——「翻訳」から捉える交差と懸隔——

企画者・司会者：室井麗子（岩手大学）

報告者：高宮正貴（大阪体育大学）

生澤繁樹（名古屋大学）

藤井佳世（横浜国立大学）

エディ・デュフルモン（ボルドー・モンテーニュ大学）

室井麗子（岩手大学）

本コロキウムでは、教育（学）と政治（学）との、緊張を孕む関係性とその内実を、「翻訳」という観点から思想史的に再考する。その際、翻訳とは対照的な言語間に情報やメッセージを移行させるものではなく、翻訳行為そのものが言語間の境界を引く・引き直す、という酒井直樹の翻訳の捉え方に注目したい。

日本では、近代以前から、古今東西の文化・テキストを摂取しつつ文化・教養が形成されてきたのだが、特に19世紀後半からの近代化のプロセスは、膨大な西洋テキストの翻訳作業と共に始まる。この翻訳作業を通して、近代化の範として「西洋」・「西洋諸言語」が見出され、そこから再帰的に「日本」・「日本語」が限定されてきたと酒井は指摘する（酒井直樹『日本思想という問題——翻訳と主体』岩波書店、2012年）。近代的学問領域について言えば、このような翻訳行為の中で近代的教養が創出され、「日本」・「日本語」を支える共同性・同一性が作り出され、その中で近代的学問領域が編制・構築・制度化されてきたと捉えられる。そして、それは今日に至るまで連綿と続いている。本コロキウムでは、このような翻訳行為のいくつかの具体的な「現場」を取り上げ、翻訳行為を通して「教育（学）」ならびに「政治（学）」がどのように構築され制度化されたのか・されているのかを探る。加えて、上記の翻訳論を用いて、「異なる領域間の翻訳」という観点からこの二つの領域の関係性自体をも再考することで、教育（学）における政治（学）へのまなざしと、政治（学）における教育（学）へのまなざしの交差と懸隔の内実の一端を浮き彫りにしてみたい。

教育学のフロイト受容を問いなおす

——宮澤康人氏の仕事を中心に

企画者：下司 晶（日本大学）
須川公央（白梅学園大学）
司会者：須川公央（白梅学園大学）
波多野名奈（千葉経済大学短期大学部）
報告者：宮澤康人（東京大学名誉教授、放送大学名誉教授）
安道健太郎（日本大学・院生）
指定討論者：櫻井 歆（日本大学）
後藤悠帆（京都大学・院生）

フロイトと精神分析は、世界の教育に大きな影響を与えたにもかかわらず、日本の教育学では長らく思想研究の対象とはされてはこなかった。例えば梅根悟・勝田守一編『世界教育学選集』は、ホールやピアジェ、ワロンは収録しているが、フロイトは収められていない。しかし思想研究ではなく読解枠組みとして捉えるならば、フロイトや精神分析の理論は日本の教育学でも一定程度受容されてきた。

そこで本コロキウムでは宮澤康人氏の仕事に焦点を当てて、日本の教育学がフロイトや精神分析をどのように受容してきたのか／こなかったのかについて、各時代の教育学、歴史学や社会学等の動向を含めて検討したい。

資料として宮澤氏の主要業績リストを配布し、そのうち精神分析に関連する文献を安道がレビューする。その後、宮澤氏にご自身のお仕事や同時代の教育学の状況等を振り返って頂き、指定討論者の問題提起を皮切りに皆さんと議論をしていきたい。

参加に準備は不要だが、宮澤氏の以下の文献を事前にお読み頂けると、議論がより充実するだろう。

「教育史かきかえの遠い道のり」（『教育学年報』第6巻, 1997年）

「〈父〉殺しの教育学」『教育学研究』（第68巻4号, 2001年）

「隠れた三者の無意識の暴力的関係」『教育学研究』（第69巻1号, 2002年）

「教育関係のエロス性」『教育文化』（第14号, 2005年）

ハルモニアの思想史における音楽と人間形成

司会者：田中智志（東京大学）
小野文生（同志社大学）
報告者：伊藤玄吾（同志社大学）
眞壁宏幹（慶應義塾大学）
指定討論者：西村拓生（奈良女子大学）

古来、音楽が人間の精神を形成する、という信念が——たとえば孔子とプラトンを源流として——洋の東西を問わず、受け継がれてきた。そして西洋ではその底流に、ピタゴラスの「天球の音楽」やプトレマイオスの「宇宙の階調」のように、宇宙の調和的秩序と音楽との間に共鳴を聞くハルモニアの思想的系譜が存在してきた。そのキリスト教的表現であった中世教会音楽がルネサンスの時代に高度に複雑化し、そこから始まった音楽の文化的な自律と展開が極限まで行き着いた後期ロマン派の時代に至ってもなお、ハルモニアの思想は繰り返し回帰し、音楽の人間形成的な力が語られてきた。

私たちの学会ではかつて、美と教育についての一連の議論が展開され、ポストモダニズムを経た「底抜け」状況で、なおも美的なものに人間形成の拠り所を求めることができるかが問われた。美的なものに対する一方での厳しい懐疑にもかかわらず、それでも他方で依然として私たちがその力を問わずにはいられない根底には、ハルモニアの思想が語ってきたような調和への予感あるいは願いがあるのかもしれない。ならば、あらためてその思想的系譜を自覚的に問い直してみたい。また、本学会の美と教育をめぐる議論の中で、これまで個別の芸術ジャンルが主題となったことはなかったが、ここでは多様な美のかたちの中で、特にハルモニアと近しく思われる音楽がもつ固有の力を考えてみたい。

シンポジウムでは、フランス文学・ルネサンス文化史に造詣が深い伊藤玄吾氏をお招きして、古代以来のハルモニア論の系譜を概観していただいた上で、とりわけ——危機と不調和の時代としての——ルネサンス期のヨーロッパにおいて、ハルモニア論が如何なる教育的可能性をもつものとして論じられ、実践されたのかを考察していただく。次いで、これまでも本学会における美と教育をめぐる議論を主導してこられた眞壁宏幹会員に、バウハウスについて報告していただく。ふつう造形教育の場として高名なバウハウスには、その予備課程にグルーノウという音楽教師がいて「感性調和化論」を展開していた。このグルーノウを中心に、ハルモニアの思想が20世紀に至ってどのように形を変え、新しい芸術と芸術教育思想を生み出したのかを語っていただく。

ルネサンスと20世紀初頭——私たちが西洋近代音楽として通常イメージするものの生成と解体の二つの地点において、音楽と教育との如何なる関係にハルモニアの思想が体现されていたのか、それを検討することを通じて、今日の私たちにとっての美的なもの人間形成的意義を問い直す議論が展開されることを期待したい。

〔第2日目〕 9月15日（日）

コロキウム 5（4号館別棟・4152）

高校生が考える思想、哲学

企画者・司会者：小玉重夫（東京大学）

報告者：東京大学教育学部附属中等教育学校「選択倫理」から

松下紀香（東京大学教育学部附属中等教育学校6年）

安達佳音（東京大学教育学部附属中等教育学校6年）

石山綾香（東京大学教育学部附属中等教育学校6年）

慶應義塾高等学校福澤研究会から

田中秀明（慶應義塾高等学校2年）

千野峻裕（慶應義塾高等学校2年）

山内慶一郎（慶應義塾高等学校2年）

西山 輝（慶應義塾高等学校2年）

指定討論者：松浦良充（慶應義塾大学）

高大接続改革の中で、高校での探究活動と、大学、大学院での研究活動をいかにしてつなげていくかが問われている。また、乳幼児保育や初等教育における子どもの探究や哲学の実践にも注目がなされている。

このような動きは、従来高等教育を中心に行われてきた知の生産システムのあり方に対する問い直しを突きつけているのではないだろうか。初等中等教育における探究活動を起点として従来の知の枠組みを組みかえ、新しい知の創出につなげ、従来の学問的なディシプリンを刷新していく試みが、思想、哲学の研究においても要請されている。

以上の試みの端緒として、本コロキウムでは、探究的な活動を行っている二つの高校から、探究活動の一端として、高校生が考える思想、哲学について報告をしてもらい、できるだけ対等な立場で、高校生と大学の研究者との間での議論をしていきたい。

〈教育思想史〉の誕生 (4)

—フランスとアメリカにおける教育学的カノンの形成—

企画者・司会者：相馬伸一（佛教大学）

報告者：関根宏朗（明治大学）

綾井桜子（十文字学園女子大学）

岸本智典（昭和音楽大学）

教育思想史テキストは19世紀における国民教育制度の成立と並行して生成された。それは、教員養成ばかりでなく、教育学的カノンの形成に深く影響している。今回は、前回に引き続いて思想史の方法論についての検討を皮切りに、フランスとアメリカにおける教育思想史記述のカノン形成について扱う。

まず、ホワイトの『メタヒストリー』に対するギンズブルグやフリードランダーらによる批判とそれに対するホワイトの応答等を通して、アウシュビッツ・ヒロシマ以降に（教育）思想史を問うことの意味を再考する。

フランスについては、19世紀末に小学校教師養成のために用いられたコンペーレの『教育学の歴史』を中心に、人物の選択やメタファーの使用といった思想史叙述の特質、スペンサー等の進化論的教育論の影響等の哲学的・思想的背景、教育の世俗化というフランスに特有な歴史的・社会的・制度的文脈との関連における教育思想史の位置について論じる。

アメリカでは、19世紀半ば文明史的特徴をもつ教育思想史テキストが成立していたが、20世紀初頭にかけて、教職の専門職化に対応した教育思想史叙述が現れた。ここでは、とくにポール・モンローの著作を取りあげ、当時の知的・社会的背景も視野に入れつつ、教育思想史叙述の特徴を探っていく。

1970年代教育学の諸相

——戦後日本教育思想史を読み直す——

企画者：稲井智義（北海道教育大学）
山田真由美（北海道教育大学）
司会者：荻原克男（北海学園大学）
報告者：稲井智義（北海道教育大学）
桑嶋晋平（東京大学）
田岡昌大（大阪青山大学）
山田真由美（北海道教育大学）
渡邊真之（東京大学・院生）
指定討論者：神代健彦（京都教育大学）
森田尚人

本学会では研究会発足当初から、戦後教育の歴史や理論（戦後日本教育思想史）を再検討することを目的としたフォーラムやコロキウムが企画され続けてきた。その成果や争点によれば、1970年前後の教育学研究や教育実践において「近代教育学批判という思想運動」（設立主意書）が生まれていた（今井1996、岡村2000、小国2012、木村2015）。しかしこの点はしばしば指摘されてきたにもかかわらず、未だ十分に検証されていない（小玉2018「狩猟者の視線から散策者の視線へ」）。

本コロキウムでは、「近代教育学批判」の思想が1970年前後に胎動し始めた歴史に留意しながら、戦後日本教育思想史を読み直す。報告者はいずれも、1980年代以降に生まれ、2000年代以降から北海道や東京で研究していた（あるいは、現在研究している）若手研究者である。各報告を通じて、1970年代の教育学の諸相を形成した城戸幡太郎、高山岩男、大田堯、持田栄一、村田栄一などの思想・理論と実践・活動が検討される。異なる対象や方法、研究関心に基づく報告や、指定討論者・参加者との議論を通じて、戦後日本教育思想史研究の複数の可能性を探りたい。

ポップカルチャーの教育思想

企画者・司会者：渡辺哲男（立教大学）

報告者：渡辺哲男（立教大学）

小山裕樹（聖心女子大学）

間篠剛留（日本大学）

田中智輝（立教大学）

本学会の事務局長補佐となった4名によるコロキウムである。現実と乖離した世界を「娯楽」として楽しむのが、かつてのポップカルチャーの世界であったが、いまや人びとは「聖地巡礼」、つまりアニメに登場する風景のモデルとなった場所を自ら歩くことで、現実と虚構をつなごうと試みる。また、aiboのようなイヌ型ロボットを「飼育」するように、テクノロジーの力によって、虚実のあいだを遊ぶような営みも可能になっている。さらには、youtubeの普及によって、短くまとめられた映像によって情報を得たり、あるいは自ら発信したりするように、コンテンツ自体のありようも変化している。そうした今日の状況を若手の教育学研究者がどのように斬るかをみてみようというのが、このコロキウムの趣旨である。とはいえ、単にアニメや映画などを分析するだけではない。むしろ、こうした文化の中に生育したいまの学生に対して、「教員」として授業を行う私たちがどのようにアプローチすべきか、ということまで敷衍させて考えてみたい。また、「ガンダム」を例に挙げるまでもなく、ポップカルチャーは、さまざまな世代や文化圏の人びとをつなぐ媒介ともなってくれるので、世代の離れた研究者が楽しく語り合える場ともしたい。

教育思想史におけるヴィルヘルム・フォン・フンボルト

—— 「古典的陶冶理論」の生成および展開の可能性 ——

報告者：伊藤敦広（作新学院大学女子短期大学部）

司会者：櫻井佳樹（香川大学）

18世紀から19世紀にかけて活動した思想家・政治家ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（Wilhelm von Humboldt, 1767-1835）の名は、20世紀初めにシュプランガーによってその思想の「体系化」がなされて以降、教育思想史研究において幾度も取り上げられてきた。なかでも人文主義的価値観にもとづく制度改革ないしベルリン大学創設という事実に結びつけられることで、ドイツにおける陶冶・教養（Bildung）の象徴としてのフンボルトというイメージが形成され、このイメージは今日にいたるまで教育思想史の一般的な語り方がある程度規定している。

教育学研究において、フンボルトの思想はふつう「古典的陶冶理論」という枠組みで捉えられる。現代のドイツにおいても、「陶冶」は教育と社会化に並ぶ教育学の基礎概念として設定されることが多いが、フンボルトはやはりその代表的人物とされている。差異を差異として肯定するフンボルトの言語理解から、アドルノやリオタールの議論にも接続する「ポスト・モダン」の条件の下での新たな陶冶概念を構想する試み（コラー）、フンボルトが示した陶冶プロセスをミメシスの接近の在り方として読み解いて教育人間学に接続する試み（ヴルフ）、フンボルトが行なった人間学の手法から教育学における理論研究と経験研究の接続点を模索する試み（マティック）など、フンボルトの「古典的陶冶理論」は今日においてもさまざまな展開を見せている。

とはいえその「古典的陶冶理論」がいかなる思想史的前提のもとで生成、展開したのか、つまり教育思想史的観点から見たフンボルト陶冶論に関しては、今もって十分な理解が得られているとはいいがたい。おそらくその一因は、諸学の専門分化が進行する以前に生まれたフンボルトの陶冶論を（再）構成するには、廻り道とでも呼べるような手法、すなわち教育学とは関係のないようにも見えるフンボルトの諸学問（自然哲学、美学論、古代論、人間学など）に陶冶論的諸要素を読み込み、それらを体系化する必要があるからだろう。

本報告は、教育思想史の立場からフンボルトの陶冶理論を取り上げる。報告者がこれまで行ってきたフンボルト研究にもとづき、フンボルトにおける陶冶理論がいかなる条件の下で生成したのか、そしてフンボルトが自らの陶冶理論をいかにして他者の陶冶（すなわち広義の教育）に展開することを試みたかに着目する。そしてここから、フンボルト陶冶論の可能性を考察してみたい。

高等教育とデモクラシー

—アメリカにおけるラーニング・コミュニティ論の歴史的検討から—

報告者：間篠剛留（日本大学）

司会者：尾崎博美（東洋英和女学院大学）

近年の高等教育に関する答申等の指摘や議論では、民主的市民の育成という観点が見え、背景に退き、より実践的な観点や具体的なコンピテンシーが重視されるようになってきたと言われる。大学での学びは能力やスキルの修得や伸長として考えられ、その成果を可視化し、社会に対して説得的に語れるようになることが重視される。そしてAI・ビッグデータ時代の到来を前に、AIに代替されない分野の能力を伸ばそうとすることも議論されている。

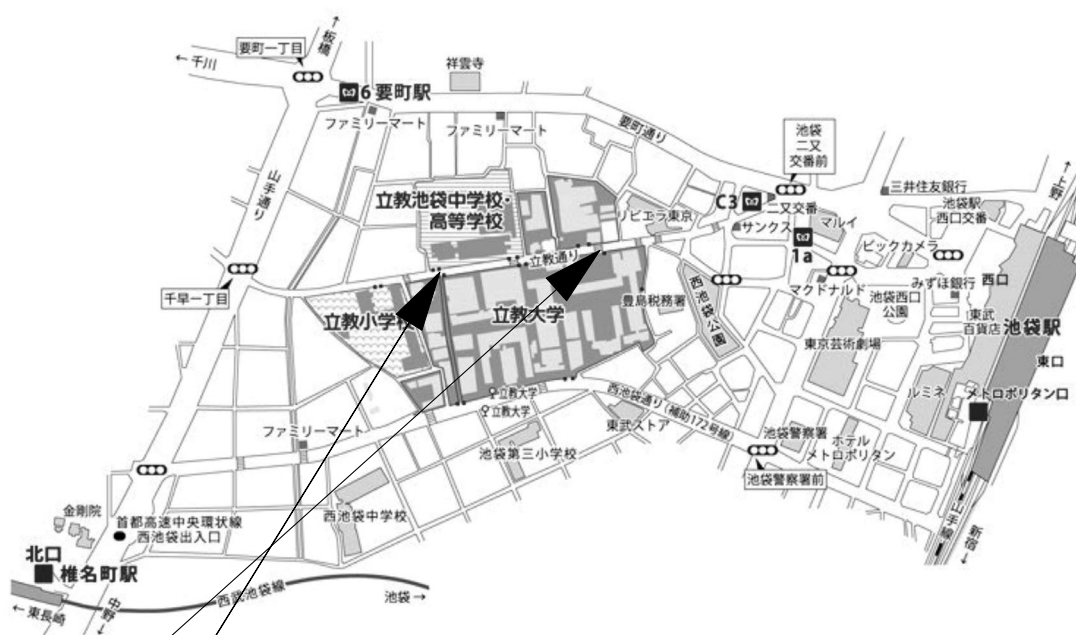
一方で、こうした状況を批判的に検討しながら、個人の能力の獲得や伸長に還元されない高等教育の在り方についても検討する動きもある。そこではたとえば、高等教育における市民の育成や高等教育の公的使命、高等教育とデモクラシーの関係の新たな可能性などが議論されている。

以上の現状認識のもと本報告では、アメリカ高等教育におけるラーニング・コミュニティ論の歴史的展開を手がかりに、高等教育とデモクラシーの関係について考察する。カリキュラム改革の手法としてのラーニング・コミュニティは、1930年代にA.ミクルジョンが実施した実験カレッジに端を発し、1960年代には実験カレッジに倣ったプログラムを開発したJ.タスマンやM.キャドワラダーに引き継がれ、やがて全米的な運動へと展開していく。運動の拡大とともに、そして高等教育をめぐる社会的状況の変化とともに、ラーニング・コミュニティ論におけるデモクラシーの在り方も変化していく。本報告ではカリキュラム改革としてのラーニング・コミュニティに関する議論を題材としながら、そこに見られる理念としてのラーニング・コミュニティに注目する。そこで「デモクラシー」や「市民」がどのように論ぜられてきたのか。大学における学び／学問との関係はどのように想定されていたのか。そしてこれらの議論が、デモクラシー崩壊の危険性さえ指摘されるビッグデータの時代の高等教育論にどのような示唆を与えているのかということも、あわせて検討してみたい。

会場案内

池袋キャンパスまでのアクセス

- 池袋駅より徒歩約8分（「C3」を出ると分かりやすいです）
- 要町駅より徒歩約6分

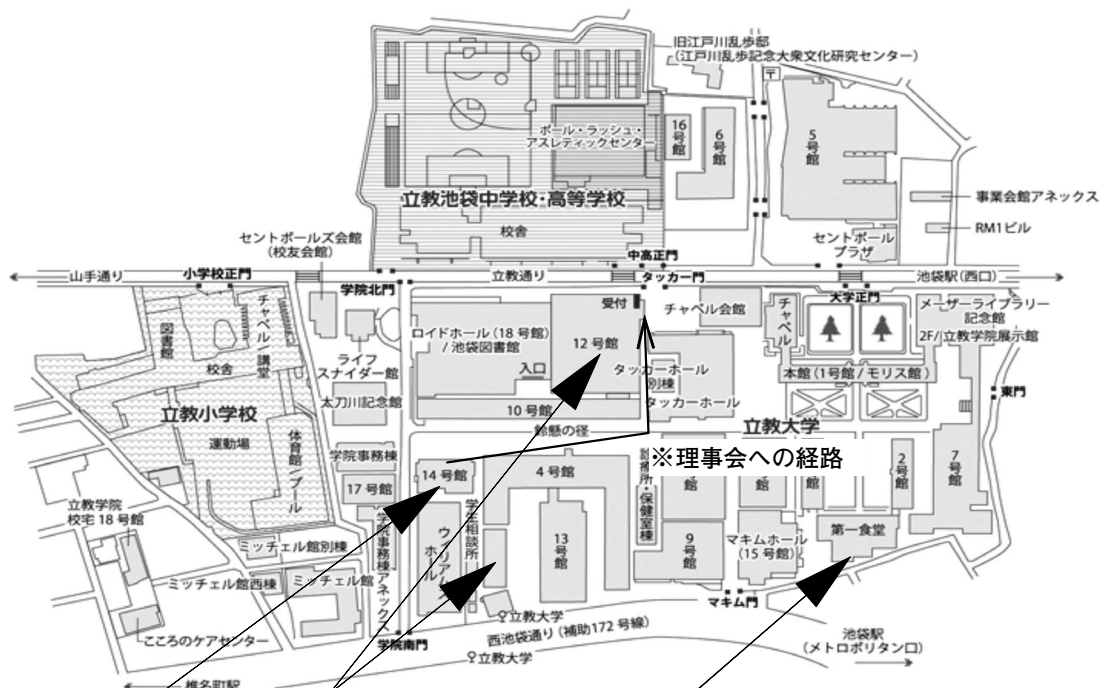


[池袋駅よりお越しの方] 正門からお越しください。

※正門は21時で閉まりますので、懇親会ご参加の方はお帰りの際ご注意ください。

[要町駅よりお越しの方] 学院北門よりお越しください。

キャンパスマップ



[14号館] 受付、コロキウム2～4、6～8 (6階 D601～603)
シンポジウム、フォーラム (2階 D201)

[4号館別棟] コロキウム1、5 (1階 4152)、休養室/授乳室 (1階 4151)

[12号館 (地下1階会議室)] 理事会、理事会・編集委員会合同会議
※14号館・4号館別棟から会議へお越しの場合は上記マップの経路でおいでください。

[第一食堂] 懇親会

※学会当日、正門 (8:00～21:00)、タッカー門、学院北門以外の門は、閉まっていますのでご注意ください。